



# 南海研だより

No. 21

1991年 2月

## センター長就任にあたり

寺 師 慎 一 (南海研センター長)



1990年4月より南太平洋海域研究センター長の任を引受けるに当たり、最初にセンターの歴史を一度まとめてみたい。

鹿児島大学は多年にわたり、8学部と1教養部よりなる総合大学として、南方地域で多くの教官が共同調査・研究を行なってきた。同じ地域研究をするにしても、各教官独自にも自分の専門外の知識や資料が必要となってくる。その様な要望にこたえて、1980年に学内施設として「南方地域総合研究センター」を発足させた。それは翌年1981年改組し、同4月に文部省令により正式の施設「南方海域研究センター」となり、この2年間は中尾佐助教授がセンター長に就任、後に中野和敬教授と寺田勇文助手が加わった。

海外調査の第I期1次(昭和56年度)は特定研究の名称で中尾佐助隊長のもとでフィジーを対象国とした。第2次(1982)特定研究は岩切成郎教授・センター長のもとに井上晃男教授、寺師慎一教授、有村正男事務室主任がセンターに加わり、片山忠夫教授を隊長とし、フィジーとソロモン諸島で調査を行なった。第3次(1983)は平田八郎教授が隊長となり、パプアニューギ

ニアで行なった。

第II期1次(1985)は早坂祥三教授を隊長としてマイクロネシア連邦(ポンペイ、トラック)、第2次(1986)は私が隊長となり、マイクロネシア連邦(ヤップ)とベラウ共和国で共同調査・研究を行なった。事務部は1986年より神宮司義成主任に変わった。

1984年より6か年は井上晃男教授がセンター長をつとめられその間、1988年南海研は7年の時限を迎えた。新センターは「南太平洋海域研究センター」と改称し、次の10年時限に入った。この時点で寺田助教授は学外に移り、柄木田康之講師を迎えた。

平成元年(1989)の特定研究はパプアニューギニアにおいて行ない、米盛 亨教授の隊長、センターの事務官は福重隆義係長に変わった。

この年は長年の念願であった交流協定が1989年12月1日、鹿児島大学、水産学部と南太平洋海域研究センター、相手国パプアニューギニアはパプアニューギニア大学、同理学部、パプアニューギニア工科大学間に締結された。この年度の特定研究に関する学術調査報告会は3月20日に催された。

これらの特定研究には鹿児島大学水産学部所属練習船「かごしま丸」と「敬天丸」教官の協力なしには不可能であったが、同時に練習船との共同研究も実施した。

本年度、南太平洋海域研究センターはこの交

流協定を基として、より充実した共同調査・研究をパプアニューギニアで行なう予定である。

この様に過去三代に渡る各センター長の努力のお陰で調査・研究活動はこれ程までに軌道に乗ってきた。今後これを維持、発展させる責任も重い。しかしセンター兼務教官、ならびに各委員会の先生方の手助けを得ながら頑張りたいと思っています。

本年は、1990年3月31日をもって全兼務教官の登録期限を迎えたが、更新手続きを4月1日に継続できるため特に問題はなかった。しかし、兼務教官より選出された全委員の任期も3月末で満了し、次の各新委員会委員選出は4月10日の教官会議開催を待たざるを得なかった。特定研究、出版、研究会、交流の各委員会の欠如している間に支障もなく無事に終わった。

本年度も事務官の交代があり竹之内則好係長を迎えた。いろいろ事情があったにせよ、この3年間毎年事務官の交代があり、各係長は初めての職場に慣れるまで大変だったと思う。

今年度を迎え、月例研究会のほかには、5月8日はシンポジウム「毒蛇 ハブ」が開催され成功裡に終わった。今回で6回目を迎える市民公開講座を8月7～9日に開催したが、ただ例年のことながら、講座のメインテーマが「南太平洋」であるため全体の講演内容の把握し難いことと、日常生活に無縁のものと思われる様で受講者がいささか少い。

今回は学外講師に在日ミクロネシア連邦のマサオ ナカヤマ大使をお迎えし、講演会の後は大使を囲む親睦会を開いた。大使は我々のミクロネシア連邦調査の用に国際局長の任にあり、隊員の調査に便宜を図ってくださった。

これからのセンターのあり方として、今までに行なってきた特定研究を今までの形で行なう事も大切であるが、事務量の多さで殆ど丸一年が費やされる。しかし、過去の実績は現地研究者との協力研究体制作りに役立っている。現にその後、幾つかの専門分野の研究者がチーム編成をして、その成果を上げてきている。月例研究会とシンポジウム、学術調査報告会や公開講

座も学問だけでなく、気軽な研究会にする必要は無いだろうか。

センターの発足以来いろいろの問題で実現していないものの一つに、センター専用の建物がある。図面引きも何度か行ない、文部省を含めた関係機関、事務局には理解を頂いているのですが、なにしろ時限にしばられていると、説得力に不足があり予算獲得までに至らない。ただ、本年度の特定研究経費の得られたことに、関係機関と事務局に深く感謝しています。次の大きな宿題の一つには、4名のセンター専任教官の指導できる大学院生と留学生の受け入れられるシステム作りがある。時限付きのセンター独自では、不可能であるにせよ、関連学部、教養部と共同でセンター教官を主指導者とする道はないものだろうか。今障害となっている時限の壁も大きいですが、次の時限到来の節の施設改組のことも考えておく必要もあると聞く。

本当に、沢山の難問と宿題を背負っている。

---

## 教官会議委員会内規について

若干不備のあった教官会議委員会内規について、教官会議から委任され、研究・交流・出版の各委員会では個別および合同で討議を重ね、内規の整備を行ないました。以下は3委員会の所掌事項（事業）です。

研究委員会：

- (1)調査研究の企画立案
- (2)講演会、シンポジウム、研究会、公開講座等の企画、実施
- (3)試資料の収集

出版委員会：

- (1)紀要（南太平洋研究）の編集・刊行
- (2)調査研究報告(Occasional Papers)および南海研だよりの編集・刊行
- (3)その他センターの行う出版活動

交流委員会：

- (1)国内外の学術・研究機関及び研究者との学術交流

(7頁末尾につづく)

センター協議会委員

(任期：平成4年3月末日)

センター長	寺 師 慎 一 (南海研)
専任教官	井 上 晃 男 (南海研)
	中 野 和 敬 (南海研)
	柄木田 康 之 (南海研)
学部・教養部	別 府 三 郎 (法 文)
	坂 東 義 雄 (教 育)
	中 谷 宗 弘 (理 )
	納 光 弘 (医 )
	小 片 丘 彦 (歯 )
	松 本 利 達 (工 )
	有 隅 健 一 (農 )
	御 木 英 昌 (水 産)
	山 下 智 (教 養)
兼務教官	早 坂 祥 三 (理 )
	岩 堀 修 一 (農 )
	片 山 忠 夫 (農 )
	林 満 (農 )
	川 村 軍 蔵 (水 産)
	田 川 日出夫 (教 養)
	根 建 心 具 (教 養)

教官会議委員会委員

(任期：平成4年3月末日)

研究委員会	○田 川 日出夫 (教 養)
	片 山 忠 夫 (農 )
	大 木 公 彦 (理 )
	北 野 元 生 (歯 )
	平 川 忠 敏 (教 養)
	寺 師 慎 一 (南海研)
交流委員会	○林 満 (農 )
	大 塚 裕 之 (理 )
	市 川 敏 弘 (理 )
	柳 橋 次 雄 (医 )
	早 瀬 晋 三 (教 養)
井 上 晃 男 (南海研)	
出版委員会	○根 建 心 具 (教 養)
	湯 川 淳 一 (農 )
	鈴 木 廣 志 (水 産)
	佐 熊 正 史 (歯 )
	片 岡 千 賀 之 (水 産)
	中 野 和 敬 (南海研)

兼務教官 (平成3年1月現在)

法文学部

上 村 俊 雄  
原 口 泉  
皆 村 武 一  
森 脇 広

教育学部

神 田 嘉 延  
甲 山 隆 司  
小 林 孝 子  
田 島 康 弘  
塚 田 公 彦  
八 田 明 夫  
矢 野 利 明

理学部

市 川 敏 弘  
大 木 公 彦  
大 塚 裕 之  
柿 沼 好 子  
佐 藤 正 典  
塚 原 潤 三  
早 坂 祥 三  
山 根 正 気

医学部

安 藤 哲 夫  
泊 惇  
花 田 修 一  
柳 橋 次 雄

歯学部

北 野 元 生  
佐 熊 正 史  
仙 波 伊 知 郎  
波 多 野 浩 道

工学部

櫻 井 仁 人  
武 石 泰 亮  
前 田 明 夫

農学部

荒 井 啓  
石 畑 清 武  
岩 堀 修 一  
衛 藤 威 臣  
片 山 忠 夫  
榑 下 町 鉦 敏 介  
坂 田 祐 介

農学部

品 川 昭 夫  
田 浦 悟  
富 永 茂 人  
永 富 昭  
橋 口 勉  
浜 名 克 己  
林 満  
八 尋 正 樹  
湯 川 淳 一

水産学部

市 川 英 雄  
市 川 洋 彦  
今 井 健 彦  
小 沢 貴 和  
片 岡 千 賀 之  
川 村 軍 蔵  
税 所 俊 郎  
重 見 之 雄  
四 宮 明 彦  
鈴 木 廣 志  
田 平 紀 男  
茶 圓 正 明  
野 呂 忠 秀  
日 高 富 男  
平 田 八 郎  
不 破 茂  
増 田 育 司  
松 田 惠 明  
湯 脇 泰 隆  
米 盛 亨

教養部

桑 原 季 雄  
崎 村 弘 文  
鈴 木 英 治  
田 川 日出夫  
仲 田 浩 三  
新 田 栄 治  
根 建 心 具  
早 瀬 晋 三  
平 川 忠 敏

医療技術短大

内 尾 康 人  
(76名)

## 平成2年度特定研究(パプアニューギニア)について

調査隊長 井上 晃 男 (南海研)

南太平洋海域研究センター(南海研)が主催する、文部省特定研究経費による平成2年度海外学術調査“パプアニューギニアの人間と環境”(3年計画の第2年次)が下記の日程で実施された。

平成2年11月5日:鹿児島発。同20日:ポートモレスビー着。同26日:同発。同30日:ラエ着。12月7日:同発。同17日:鹿児島着。

この海外学術調査に参加した研究者および大学院生は以下の通りであった。

### 第一課題: 農業資源の開発

林 満 (鹿大農・事務局長)  
富永 茂人 (鹿大農)  
坂田 祐介 (鹿大農)  
田浦 悟 (鹿大農)  
中村 志道 (鹿大農院生)

### 第二課題: 沿岸海域の増養殖資源

井上 晃 男 (鹿大南海研・隊長)  
塚原 潤三 (鹿大理)  
大木 公彦 (鹿大理)  
四宮 明彦 (鹿大水)  
内尾 康人 (鹿大医短)  
棚部 一成 (東大理)  
大葉 英雄 (東水大)  
加藤 敬史 (鹿大理院生)  
津田 英治 (鹿大水院生)

### 第三課題: 病原ウィルスの疫学

寺師 慎一 (鹿大南海研・総括)  
三上 聖治 (弘前大医)

### 第四課題: 伝統社会システムとその変容

皆村 武一 (鹿大法文)

### 第五課題: 熱帯外洋域の環境

市川 敏弘 (鹿大理)  
西 徹 (鹿大水)

益 満 侃 (鹿大水)  
東 政 能 (鹿大水)  
日 高 正 康 (鹿大水)  
鈴木 尚志 (鹿大理院生)  
渡辺 俊輝 (鹿大水院生)

事務局:

竹之内 則好 (鹿大南海研)

この学術調査は、南海研が設立された1981年度にフィジーで実施されて以来通算7回目にあたり、また、パプアニューギニア(PNG)における調査は、1983、1989年(昨年度)に次いで3回目であった。現地では、前回の調査に際して改編調印されたパプアニューギニア大学(UPNG)および同工科大学(PNGUT)と鹿児島大学との交流協定に基づき、両大学のスタッフとの共同調査が順調に行なわれた。

まず最初の寄港地であるポートモレスビーでは、UPNG理学部の松岡講師が中心となって調査隊と対応してもらった。第一および第四課題の隊員は同大学のマイクロバスを使ってポートモレスビーとその周辺地域の調査を、第二課題の隊員は理学部附属臨海実験所のあるモツポレ島に滞在してサンゴ礁地域の調査をそれぞれ実施した。また第三課題の隊員は、主としてUPNG医学部附属病院で試料を収集した。この調査の期間を通じて、UPNG副学長 J. LYNCH 氏他同大学の多くのスタッフにお世話になった。

次いでラエに停泊した。ここでは、PNGUTの副学長 M. MORAMORO 氏自ら現地側のコーディネーターとして動いてもらった。調査は、課題あるいはグループごとに、ラエ、マダン、ゴロカなどでほぼ予定どおり行なわれ、その滞在日数の割には、実りの多いものであった。

また PNG までの往路の公海域とポートモレス

ビー沿岸海域において、第五課題と第二課題の隊員による海洋構造および地質に関する調査が実施された。これらの調査で得られた結果についての報告会は平成3年4月下旬に開催され、さらにその報告書は同年度中に刊行される予定である。

この調査は、水産学部練習船敬天丸によって実施されたものであり、ここに同船の船長以下乗組員各位のご協力に感謝する。また本調査が実施できる運びとなったのは、ひとえに鹿児島大学長井形昭弘先生を始め本部事務局の方々のご努力によるものである。ここに記してお礼を申し上げる。

最後になったが、1982年以来その職にあり、

南海研のPNGにおける調査に際して、終始現地側の協力研究者の中心となって活躍されたパプアニューギニア工科大学の副学長 M. MORAMORO 氏が平成2年12月をもって退任された。31才の若さでその地位につかれて以来約8年、同大学の目ざましい発展に寄与された同氏を惜しむ声は現地において極めて大きい。これまでの3回にわたる PNG での南海研の特定研究の実施や、同大学と鹿児島大学との教育研究に関する交流協定の締結に際して種々ご尽力いただいた MORAMORO 氏に心からお礼を申し上げるとともに、同氏の今後の益々のご発展を祈る次第である。

## パプアニューギニア調査に参加して

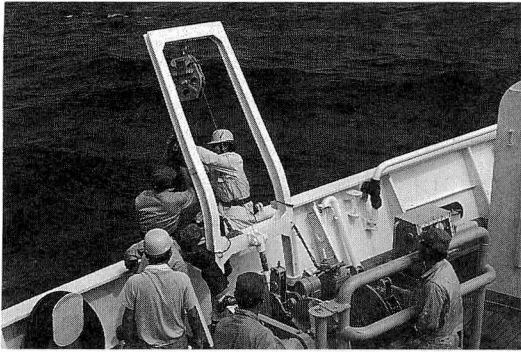
大木 公彦 (理学部)

非常勤講師をしている大学の講義で、「11月・12月の講義は休講です。パプアニューギニアへ調査に行ってきます」と言ったとたんに学生の間からドッと笑い声が上がった。ある友人に調査のことを話すと、「パプアって、自然の残った素晴らしい所なんでしょうね」という答えが返ってきた。学生の笑い声も、友人の答えも、パプアニューギニアは未開の地で、とんでもない所へ行くものだという響きを感じられる。

11月5日、訪れたことのない国へ出かける緊張と期待の入り交じった、一種の興奮状態の中、多くの人達に見送られて谷山港を出港した。練習船による研究航海を十数度経験させて頂いたおかげで、15日間の航海に対する不安はなかったのだが、3日目からしばらく続いた台風によるうねりには少々つらい思いをさせられた。この3日目から始まった洋上大学の最初の講師であるU氏は、途中から横になって講義を行なうことになり？本当に気の毒であった。翌日の洋上大学は、台風のうねりの中、船と酒に強いS氏が“台風によるはまち漁業の被害について”

講義されたが、学生諸氏の気分はいかがだったのだろうか。この翌日には採水調査は中止され、台風を避けるために北緯10度まで南下することになる。私は、年間を通じて静かな赤道海域を通過した日に洋上大学の講師を発令され、洋上大学学長のT氏に深く感謝している。ともあれ、ドクターT先生が蔓延させたポーカート、隊長I先生、M氏と行なった、航海中ほとんど欠かさなかった洋上テニス、船酔いで働かなくなった脳細胞に刺激を与えてくれた洋上大学のおかげで、15日間の航海は短く感じられ、楽しいものであった。

11月20日朝、ポートモレスビー港へ向かってバリアリーフの狭いチャンネルを通過した。そこから見えるパプアニューギニアの首都ポートモレスビーの景色は、私の想像をはるかに超えたものであった。いくつかのビルが赤茶けた丘の上に建っているほかには家らしい家もなく、見渡すかぎりの海岸地帯には赤茶けた地肌の露出した丘陵地が続いている。あとで分かったことだが、荒涼としたはげ山のおもな原因のひとつ



敬天丸における採水調査

つに、現地の人々が面白半分に火をつけることもあげられるそうである。その現地の人々の大半は、山から仕事を求めてポートモレスビーに集って来る職のない人達で、そのために首都の人口の実数は把握できず、8万とも20万とも言われているのだそうだ。港に接岸後、日本大使館の方や、パプアニューギニア大学のM氏がパプアニューギニアの治安の悪さについて詳しく話をされた。幸いに、私たち水産班は、入港したその日のうちに、美しい自然に囲まれたモツポレ島のパプアニューギニア大学所属の臨海実験所に移動したため、治安の悪さを実感しないまま、自炊生活を楽しみながら調査することができた。しかし、治安の悪さを実感できなかったことが、2番目の寄港地であるレー（ラエ）のスーパーマーケット事件？を引き起こしてしまったに違いない。レーで行なう調査に必要な食料の買出しが終わって、疲れを癒すために必要な？ビールとウイスキーを買う時のことである。入口が一つで、5m四方ほどの狭い部屋に入って、金網で仕切られたカウンター越しに欲しい酒類を注文した。酒の嫌いな私は、調査グループの会計を担当していたので、当然、最後まで残ってお金を払うことになる。ふと気がつくと、仲間がウイスキーを抱いていなくなり、私は一人狭い空間に取り残され、周りを十数人の現地の人達に取り囲まれていた。彼らは、私がどのポケットからお金を取り出したかよく観察していたのだろう。レシートを書いてもらっているうちに、その囲みが狭まり、そのうちの一人が押すようにして私のポケットに手をいれようとした。

とっさにその手をはらって、ノーと叫び、彼らが一瞬ひるんで下がったすきに、ビールのケースをつかんで脱兎の勢で外へ出た。もちろんレシートはもらえずじまいだ。この時ほど、テニスと大声を出す訓練をしていて良かったと思ったことはない。調査は、現地の船が故障して、苦労して買ったこれらの品々は無駄に終わってしまった。

少々怖い思いはしたが、彼らが窃盗や強盗を行なう背景には、彼ら独自の生活の中に、突然、大国が進入してきて、彼らの経済を破壊したことがあるように思われてならない。港には巨大な船が横付けされ、コンテナの山が築かれていた。彼らの平均的な一ヶ月の給料が2万円前後と聞いたが、これらの物資は誰が消費するのだろうか。町を走る車のほとんどが日本車である。先進国？は、彼らに自らの手で彼らの国を豊かにする方法を教えるべきなのに、自分の国で作った物を高く売りつける相手ぐらいにしか考えていないのだろう。発展途上国にあぐらをかいて飽食に明け暮れ、物とゴミがあふれ、荒んでいく超大国も、独自の文化が、好むと好まないとかかわらず、文明という波に押し流されていく発展途上国も、ともに不幸であるような気がしてならない。

敬天丸の甲板から見た、水平線に沈む太陽のグリーンフラッシュ、私たちの住む銀河系のすぐ外側をまわる二つのマゼラン星雲の美しさを思い出しながら、いつまでも美しく平和な地球であってほしいと願ってやまない。



ポートモレスビー市場における農産物調査

# 南太平洋海域研究センター研究会発表要旨

第16回

1990年1月22日

## 平成元年度

### パプアニューギニア調査について

米盛 亨 (水産)

平成元年11月10日より約40日間にわたって実施された特定研究については種々の困難が予想されたが、南海研を中心に調査隊各自の努力および敬天丸乗組員のご協力によって予想以上の成果を収め、次年度以降の調査継続に関する基礎造りの目的を達成した。研究会ではその調査活動を、教育学部の八田明夫隊員撮影によるビデオ記録を使って報告した。

第17回

1990年2月26日

## フィリピンの山

浦島 幸世 (教養)

フィリピンは、日本と同じように、太平洋の西縁に位置し、海洋プレートが滑り込み、数千万年前から、火成活動が盛んであった地域であるから、その山々の地質には、共通点が多い。しかし、フィリピンの各地で白っぽい崖によくお目にかかるのは、低緯度の環境でできた石灰岩が多いからであろう。

その火成活動による花こう岩質岩石は、両方に共通するものであるが、それに伴われる金属鉱床には違いがあり、日本ではほとんど見られない斑岩銅鉱床がフィリピンには多い。セブ島のアトラス鉱山は、世界指折りの銅山である。これとサンミゲルビールとは同じ資本系列という。バギオ山地のベンゲット道路建設は、鉱山開発と無縁ではないはず。

斑岩銅鉱床は、銅のほかに、金を含むことがある。金銀鉱脈は、バギオ山地のほかにも、各地に分布している。それらにタッチしているオ

ーストラリアなどの人々の来日時には、鉱床学的情報を交換する機会がある。生成時代のデータが増えると、火成岩、金鉱床、地熱帯の関係をもっと確かめることができる。銅と金は、砂糖とともに、フィリピンの主要産物になっているので、その有効な探査と生産が望まれる。

バギオ山地のサントトーマスII鉱山で、斑岩銅鉱から比重選鉱で得られた金精鉱を調べてみると、金はAu-Ag合金鉱物として含まれ、Agの一部はPdに置き換えられている。また、PdはPd-Sb鉱物やPd-Te鉱物としても認められる。Pd(パラジウム)は白金族元素の一つである。アメリカ地質調査所などの分光分析によって、あるいは、日本の銅精錬などの副産物として、微量の白金族元素がこの種の鉱石に含まれている例は知られていた。しかし、その存在状態を示す鉱物の発見は、これらが最初である。花こう岩には、この元素は乏しいので、地下深部に超塩基性火成岩があると考えられる。

超塩基性火成岩が分布する地域では、クロム鉱床の開発が進んでいる。近年、砂白金も発見され、その鉱物組成を調べることができた。

フィリピンには、1978年と1981年に、訪れる機会があった。しかし、組織的な研究には発展せず、学位を望んでくる鉱床学研究者にふさわしい環境はこちらに乏しく、また、教育面の交流も叶わなかった。フィリピンの山々に心残りが無いとはいえない。

---

(2頁末尾より)

(2)南太平洋海域研究に関する情報の収集と交換

(3)その他センターの行う地域との交流

平成元年度特定研究  
「パプアニューギニアの人間と環境」  
報告会

第1 課題「主要集水域の生態地誌」

マーカム河集水域の植生

中野和敬(南海研)・渡辺隆一(信州大)・

Winta Moi(PNG 大)

ラエ及びポートモレスビー近郊の農業

林 満・宮脇勝雄(農)

ラテライト化作用による金の富化

根建心具(教養)

第2 課題「沿岸海域の増養殖資源」

パプアニューギニア沿岸域の栄養塩類

井上晃男(南海研)・南波 聡(水産)

第3 課題「病原ウイルスの疫学」

パプアニューギニアにおける成人T細胞白血病の疫学調査

寺師慎一(南海研)・石田貴文(京都大)・

Tom TALONU・Tukutau TAUFU(PNG 大)

第4 課題「伝統社会システムとその変容」

PNGの貨幣経済受容の象徴論に向けて

柄木田康之(南海研)・石井眞夫(佐賀大)

パプアニューギニアの児童の教育

平川忠敏(教養)

ラエ市における Migrant の Residential Area 形成とその諸問題

田島康弘(教育)

パプアニューギニアの伝統的漁業権

田平紀男・松田恵明(水産)

パプアニューギニアの水産政策

松田恵明・田平紀男(水産)

第5 課題「熱帯外洋域の環境」

1989年11月九州南岸より赤道にいたる海洋観測

湯脇泰隆・東 政能・益満 侃・西 徹(水産)

西太平洋における浮遊性有孔虫群集と海水縦断面構造

八田明夫(教育)・湯脇泰隆・

西 徹・益満 侃・東 政能(水産)

北西太平洋における1989年11・12月の仔稚魚

の出現および表層流について

柿添 太・小沢貴和(水産)

総括報告

米盛 亨(水産)

シンポジウム「毒蛇ハブ」

廣澤 一成(東大)

鳥獣害の比較的少ない我が国にあって、ハブによる傷害は、その致命率の高さから、第一級のものといえる。国土庁ならびに鹿児島県の援助により奄美大島においてハブの組織的な駆除研究が開始されて約15年を経過し、ハブの生態や生物学的特性という基本的な問題から駆除方法まで研究され、すでに実用に供されている駆除方法もある。この間、ハブに対する客観的認識が深まり、少し大袈裟に云わせていただくなら、人間とハブとのあるべき関係に新たな示唆を与えていると考えている。このシンポジウムでは主としてハブ駆除研究グループのこれまでの成果の一端を紹介し、さらに今後のハブ駆除対策の採るべき方策を検討した。

1. ハブとはどんな動物か…林 良博(東大)

2. ハブの毒とその作用……木原 大(医)

3. ハブ咬傷治療の現況  
……浅沼 榎(鹿児島県立大島病院)

4. ハブ誘引物質開発の試み  
……服部正策(東大)

黄土高原と戈壁灘

田川日出夫(教養)

みどりの遣唐使の一行に加わって、中国甘肅省蘭州市及び敦煌を短時間訪れ、緑豊かな地にはない、人間と環境との厳しい戦いを見てきた。黄土地帯の裸地(日本の約1.6倍の面積)に緑をとり戻そうと努力している人々、沙漠のオアシ



スを少しでも広げようとして、唯一の緑化ポプラを、乾燥と灌水による塩分の析出という悪条件の中で育てようと努力している人々の姿は、豊かな土地に住む日本人には殆んど理解できないであろう。短時間の見聞なので、理論的な考慮はできないが、“南太平洋の楽園”とは異なった世界を紹介した。

第21回 1990年6月6日

### アマゾンの民衆宗教

古谷 嘉章 (九州大)

ブラジル北部 (アマゾン地方) は、ブラジル「発見」以来の歴史のなかで、外国や国内のそのときの先進地域の利害関心によって、独特の位置を与えられてきた。つまり外部によってアマゾンは「発見」されつづけてきたのである。この点は、アマゾン地方の民衆の宗教的伝統を考える際にも、重要性をもつ。

この日の発表では、それぞれの時期における民衆宗教伝統の変遷をたどりつつ、その「発見」の一面を明らかにした。尚、焦点となったのは、発表者がフィールドワークを継続している「アマゾンのアフリカ系の憑依宗教」である。

第22回 1990年7月16日

### 鹿児島湾の環境(地形・底質・水質など)

大木 公彦 (理)

鹿児島湾は、特殊な地質学的背景(地溝、カルデラなど)を反映して、水深200mをこえる海盆、複雑な地形を持つ世界にも類のない内湾である。1977年以来、鹿児島湾から採集された86点の表層堆積物に含まれる「星砂の仲間」底生有孔虫について解析し、この湾の環境(地形、底質、水質など)との比較を行ってきた。その結果、130属317種の底生有孔虫を確認し、底生有孔虫群集と環境、とくに水塊(1. 外洋水; 2. 塩分濃度のやや低い富栄養水; 3. 海盆の

停滞水; 4. 海底火山性噴気による酸性水)との間に良い対応を認めた。また、異なる水塊の接する潮目付近に特徴的な群集の存在が明らかになった。

第23回 1990年9月25日

### “減圧症”の病理発生について

北野 元生 (歯)

潜水士などにみられる減圧症の発生に関しては、ある気圧環境下(例えば海底)に一定時間滞在した生体がそれより低い気圧環境下(例えば大気圧下)に急速に移した際、血液や組織中に溶解しているガスが気泡化することに原因が求められる。しかし減圧症病変の病理発生 of すべてを気泡発生のみで説明するのは難しく、多くの要因についての検討が必要である。本研究会では減圧症と脂肪寒栓との関わりについて述べた。

第24回 1990年10月22日

### 黒潮文化圏の考古学

上村 俊雄 (法文)

南西諸島即ち黒潮の島々は、九州から南漸あるいは北漸する先史人にとって、まさに「道の島」を成していた。従来、北漸資料として南島の「ゴホウラ貝・イモ貝などの加工品」が、南漸資料として縄文時代後期の市来式土器と弥生時代中期の山ノ口式土器が知られていた。最近年に至って、北漸資料として南島の土器、南漸資料として従来の知見より上限が数千年溯る土器、黒曜石製石鏃、金属器などが確認されている。近年の成果をスライドによって紹介した。

平成2年度鹿児島大学公開講座講演要旨  
「南太平洋－自然と人々の生活」

平成2年8月7日～9日

ソロモン諸島事情

中野 和敬 (南海研)

ソロモン諸島という国がどこにあるか知っている日本人はほとんどいないが、ガダルカナル島という名は年輩の方ならかなり有名である。太平洋戦争中日米両軍が文字どおり死力をつくして戦った島で、同国の首都ホニアラの郊外には日本兵の慰霊塔がある。全人口はほぼ30万、総面積は離島部を含む鹿児島県の3倍余で、平均人口密度は日本の30分の1以下と、日本人から見れば大変過疎である。国民の大部分はメラネシア人と呼ばれ、皮膚の色がアフリカ黒人同様黒い。しかし、少し住んでみると、島ごとに色の黒さに差のあることがわかってくる。国民のほとんどはキリスト教徒で、海岸部にある伝導師の根拠地のまわりは生活環境の便益性が高いため、大きな村ができるようになり、畑の休閑期間が必然的に短縮され、そのような条件に適したサツマイモが近年主食となった。

島弧と資源

根建 心具 (教養)

環太平洋地域は全世界に多くの地下資源を供給している。人類の生存にとって不可欠な資源を、地球科学的にとらえる。

地球のマントルは対流していると考えられ、対流が沈みこむ場所では地震・マグマ・海溝が存在する。またマグマの発生は島を創り、島弧となる。縁海の存在しない太平洋東海岸地域は陸弧と呼ばれ、島弧とは多くの類似性がある。島弧や陸弧には特徴的な資源が多く形成されており、その形成とマグマの活動とは多くの場合密接な関係がある。資源形成に果たすマグマの

役割については現在活発に議論されているところである。古くはマグマが資源を運んだとする化学的役割が強調されていたが明瞭な証拠がなかなか出なかった。ここ20年、温泉や地熱と同様、地下水を循環させた物理的役割が強調され、成因論に大きな成果を上げた。一方、古い考えもハロゲン元素の挙動などから再評価されつつあり、プレートの沈み込みに伴う大小様々な規模の海水の地下循環によって資源が形成されたとの説明が検討されつつある。

オセアニアの病気

寺師 慎一 (南海研)

オセアニアの病気には、やはり感染症が多い。過去において日本では一般的であったものの、現在では忘れられた病気である。

しかし、現在これほど熱帯地域に調査・研究や観光で滞在する人も多くなると、この病気に罹患する可能性も高くなる。

一般に口から入る病気、すなわち胃と腸の細菌性感染症が多い。下痢をする病気として理解いただけだと思う。

それ以外は良く知られたマラリアがある。一般にその種類は3日熱、4日熱と熱帯熱マラリアが代表的である。先ず前者の2つでは死なない。後者は寄生する赤血球の数が圧倒的に違う。その結果壊れる赤血球の屑が脳の血管に詰まる脳梗塞となり、悪性マラリアと呼ばれるゆえんである。更に、マラリア予防薬クロロキシン製剤は無効であることが多い。

あと肝炎についてはA型とB型ウイルスがあるが、経口感染をするA型はワクチンで防げる。B型は①母児(出産)②輸血③夫婦(sex)に関係しているのでまず心配は無いと思う。

## 東南アジアにおけるヤシ科植物の利用

堀田 満 (理)

ヤシ科は世界の熱帯地域を中心に約220属、2500種が知られている。大型の羽状や掌状に切れ込んだ葉を分枝しない、木質の桿の上部に群がり付けた独特の生活型(ヤシ型)をしていて特徴的で、多くの種が観賞用に栽植されている。東南アジア地域(インド東部からメラネシア・オーストラリア地域)に原産分布または栽培される約420種のヤシ科植物の種名と利用の用途についての整理した表にもとづいて、ヤシの生活型と利用の特質について述べた。すなわち、葉の編み料や葺料利用、木本性の直立した桿の建築材への利用やトウ類に見られるようなツル性のヤシの籐利用(トウを始め非常に多くの種)、1回開花枯死型ヤシ類の桿にためられているデンプン利用(サゴヤシ)、花序の切断面からの糖液利用(サトウヤシ)、芯芽の野菜利用、葉鞘や果実の繊維利用、そして胚乳の油脂利用(アブラヤシやココヤシ)や植物象牙利用(ゾウゲヤシ)など、マレーシア地域で高度なヤシ利用が展開されていること、それがヤシ科植物の種類数が激減するメラネシア東部からポリネシアの太平洋諸島地域では特定の種(ココヤシ)の多面的な利用に置き換えられることを、現地で撮影したカラースライドを使いながら述べた。さらにヤシ類の利用についての将来の展望にも触れた。

## マレー半島の歴史と文化

桑原 季雄 (教養)

マレー半島は先史期以来、大陸部から南太平洋への民族移動の出口として、また歴史時代に入ってからインドと中国を結ぶ東西交渉の要衝として重要な位置を占めた。インド商人がマレー半島の脊梁を横断していた古典期にインド文化が受容され、多くのヒンドゥー小国家が発生した。中世期に入ってマラッカ海峡を通過するルートが知られるようになるとイスラム商人が往来し、マラッカ王朝の成立とともにイスラ

ムが受容された。半島における最初の統一国家マラッカの崩壊とともに西欧列強やインドネシアの各地からの移民による王国が割拠し、イギリスによる植民地支配の完成によって再び統一され、今世紀初頭に人工的に複合社会が形成された。このようにマレー半島は様々な民族が往来し、多くの高文明の波に洗われ、その受け皿として歴史的、文化的にダイナミックな展開をしてきた。

## 陸橋と生物の移動の話

大塚 裕之 (理)

アジア大陸の周辺に位置する島々には、大陸からかつて移動してきたことを示す多くの陸棲動物の化石が産するが、現在もそれら子孫の一部は島々の動物相を特徴づける固有種として生息している。日本列島、琉球列島さらにインドネシアの島々における化石および現生動物相を見ると、それらは、新生代第四紀の数回の寒冷期に起こった海水面降下期に形成された陸橋を経由して渡来したことがわかる。これら陸棲動物の移動ルート、移動方向さらに大陸と陸地接続した島々の範囲は、化石・現生種の分布からある程度推定できる。現在、生物地理学的に生物分布境界線とよばれる線は、海水面降下期に大陸と陸地接続し得なかった海峡の存在を意味する。現生または化石種からみて同じ動物地理区に属するとされる島々でも、現在その島と島の間には千メートルに達する深い海が存在する場合がある。これらの深まりは、第四紀の陸棲動物の移動後に起こった、この海域の沈降運動に起因しているとされ、さらにこの沈降運動は、第四紀中期以降のプレートの活動と関連しているとされている。

## 南太平洋へのヒトの移動

佐熊 正史 (齒)

オーストラリアも含めた南太平洋地域へ拡散して行ったヒトの流れには、大変大まかな言い方をすれば、2回の本流があったと考えられる。

第1は、更新生の終わり頃、今からおよそ4～5万年程前に、人類史上で初めてウオーレス線という動物地理学の境界を渡った人々の流れである。彼らは、インドシナ半島からインドネシアの西部域にかけておよそ百万年の長きにわたって住み続けてきたアジアの原人類の子孫である旧人類もしくは新人類のグループで、当時、浮き沈みを繰り返していたスンダ大陸からサフル大陸へと拡散して行った。

第2は、4千年前頃に、ニューギニア北部の沿岸部で忽然と姿を現した、ラピタ土器を生み出した極めて海洋性に富んだ人々の流れである。彼らは瞬く間にメラネシアの離島部から、さらには西ポリネシアを経て、1千年前頃までには東ポリネシア全域まで拡散して行った。彼らは、考古学、言語学、民族学、人類学などの側面からみて、おそらくは東アジアを故地とするモンゴロイドの一派であると考えられている。

## ミクロネシア連邦の紹介

マサオ ナカヤマ  
(ミクロネシア連邦大使)

我が国は1521年マゼラン船長により世界に紹介されてその存在が知られた国です。長い間信託統治の国でしたが1986年11月3日主権国家として独立しました。国土はヤップ、トラック、ポンペイ(首都)とコスラエの4州よりなり東西2,700km南北は赤道より北緯16°、100万平方kmの広さがあり約600の島々が点在しますが、うち60の島に人が居住しています。年間気温は23～30℃の熱帯性気候です。

輸出農産物は陸地が狭いためにコブラ(ヤシの種肉)と良質のコショウです。海洋資源は豊富でも漁業開発の遅れと機材不足のため、魚は

獲れるのに日本漁船の独占に近い状態です。カツオとマグロは合計17万トン(1億5000～1億8000万USドル)が漁獲されています。

観光資源には白い砂浜に青い海、スキューバダイバーにとって面白い環礁内の沈没船(トラック州)、ヤップ州の石貨(現在も儀礼用)があります。ポンペイ州のナンマドールとコスラエ州のレロ遺跡も残しています。

ミクロネシア連邦では世界に誇る航海術を忘れるわけにはいきません。伝統的航海術は①星座の動き、②波の変化(島の近くでは変わる)と③ウミ鳥、さらに完成された海図は現代のものとは何ら変わりはありません。

さらに超能力者も知られています。雷、雨や竜巻にいたるまで自由に操り、雷は通信手段にも利用されました。

現実に戻ると、食糧問題があります。野菜や果物は生産可能な国土でありながら、米、肉と缶詰類にいたるすべてを国外に依存しています。今のミクロネシア連邦は主権独立国家となり、経済面では①漁業開発、②ヤップの衣類工場、③石鹼の原料・コブラの輸出、④ポンペイの貝殻ボタン工場の設立が行われました。アメリカの援助五カ年計画は各区ぎりごとに削減を見るようになりました。1981年に始まった日本の援助は道路の整備、漁船の購入、冷凍施設やヤップ漁港設置などで、これはアメリカに次いで2番目です。

統計上1人あたりのGNPが1,200USドルの国とはいえアメリカの援助にその殆どを依存しています。この様な、乏しい財政ながら在外ミクロネシア連邦大使館は3つでアメリカ、フィジー、日本に設立されています。政治的、歴史的、地理的に近親関係にある日本国が、ミクロネシア連邦に大使館を設置していないことに寂しさをおぼえています。最後に、この公開講座でミクロネシア連邦の一部でも知って頂いた受講者ならびに、南太平洋海域センターの企画に深く感謝いたします。(要約：寺師慎一)

## 南海研センターの出版物

### Occasional Papers No. 18 (1990)

Distribution and ecotypic differentiations of wild and cultivated rice species in Africa (ed. Tadao C. Katayama)

アフリカにおける栽培稲と野生稲の生態分化の研究を目的とする文部省海外学術研究の結果をまとめたものである。前半9編の論文は1988年に行ったマダガスカル及びタンザニア調査について、野生稲の分布を立地条件と形態的変異性を報告し、栽培稲の各地域ごとの位置付け、種子の形態、アミロース及び蛋白の分析結果を論じてある。後半6編の論文は1984年と1985年に行ったマダガスカル、タンザニア、ケニア、ナイジェリア、アイボリーコースト、リベリア、セネガル、ガンビアで得た現地調査の記録に基づいて、引き続き行ってきた分析結果を、1988年の結果と対比しつつ論じられている。B 5版、258頁。

### Occasional Papers No. 19 (1990)

果樹—亜熱帯と温帯の接点— (岩堀修一編)

本号は本研究センターの主催によるシンポジウム(平成元年10月20日)の記録で、仁藤伸昌(佐賀大学農学部)、富永茂人(鹿児島大学農学部)、宇都宮直樹(京都大学農学部)、白石真一(九州大学農学部)の4氏の発表と総合討論を中心にまとめられている。B 5版、70頁。

### Occasional Papers No. 20 (1990)

The progress report of the 1989 survey of the research project, "Man and the environment in Papua New Guinea" (ed. Kazutaka Nakano, Akio Inoue, Shin'ichi Terashi, Yasuyuki Karakita and Akio Hatta)

これは平成元年度の本研究センターの特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」の研究報告書である。この研究プロジェクトの5課題それぞれにつき、現地調査実施概要につづいて

個々の研究報告がおさめられている。すなわち、第1課題の「主要集水域の生態地誌」は3篇、第2課題の「沿岸海域の増養殖資源」は3篇、第3課題の「病源ウイルスの疫学」は2篇、第4課題の「伝統社会システムとその変容」は5篇、第5課題の「熱帯外洋域の環境」は3篇の計16篇である。B 5版、xv+85頁。

### 南太平洋研究10巻1号 (1989)

本号には以下の論文が掲載されている。

Ôki, K.: Ecological analysis of benthonic foraminifera in Kagoshima Bay, South Kyûshû, Japan. 1-192, pls.

Kusigemati, K.: A new species of *Sympherta* Foerster from Formosa (Hymenoptera: Ichneumonidae). 193-197.

Nagatomi, H. and Nagatomi, A.: Female terminalia of *Dioctria nakanensis* and *Microstylum dimorphum* (Diptera, Asilidae). 199-210.

Taufiq, M. and Iwakiri, S.: The household fisheries management in the North Coast of Java, Indonesia. 211-234.

### 南太平洋研究10巻2号 (1990)

本号には以下の論文が掲載されている。

Ajisaka, T. and Kilar, J. A.: *Turbinaria* sp. (Phaeophyceae, Sargassaceae) from Iwayama Bay, Palau Islands (Western Caroline Islands). 235-240.

Higo, N., Plotner, D., Nakashima, S., Fujieda, S. and Hashi, H.: On the fish gathering effect of the artificial reefs ascertained by the diving observation—XIX. At the reefs offshore of Tanegashima, Kagoshima Prefecture. 241-251.

Higo, N., Mandey, C. F. T., Kamimizutaru, T., Nakamura, M. and Fujisaki, K.: On the behavior of net fishing gear ascertained by diving observation—II. Gochi net in Eguchi Hama. 253-261.

寺師慎一, 中島洋明, 山口幸一, Abaidoo, K. J.,

- Talou, T., Taufa, T.: パプアニューギニアにおける成人T細胞白血病の疫学調査, 263-274.
- Kitano, M., Urago, A., Hayashi, K., Kawashima, M., Funakoshi, K., Yamada, K. and Tokufuji, S.: A pathological study on cerebral lesions in diver's decompression sickness (DCS). 275-285.
- 田島康弘: 奄美出身者のアメリカ移住-喜界島, 小野津出身者を中心に. 287-303.
- Nakane, T. and Yamane, Sk.: A new species of the genus *Metocetus* Gertaecker (Coleoptera, Rhipiphoridae) from West Sumatra, Indonesia. 305-308.
- Nagatomi, A. and Nagatomi, H.: A new *Arthroteles* from South Africa (Diptera, Rhagionidae). 309-316.
- Kusigemati, K.: A new species of *Apholium* Townes from Formosa (Hymenoptera: Ichneumonidae). 317-320.
- 南太平洋研究11巻1号 (1990)  
 本号には以下の論文が掲載されている。  
 田島康弘: ポートモレスビーの移住者集落, 1-21.  
 Nedachi, M., Enjoji, M., Yamamoto, M., Malagun, S., Taguchi, S., Shiga, Y., Higashi, S. and Manser, W.: Role of halogen elements on the Panguna porphyry copper mineralization, Bougainville, Papua New Guinea. 23-36.  
 Nagatomi, A. and Nagatomi, H.: Three new *Rhagio* from the Ryukyus (Iriomote I.) and Borneo (Diptera, Rhagionidae). 37-49.  
 肥後伸夫, 柿本 亮, 清水 博, Plotner, D., 吐師 弘, 上水樽豊己: 潜水観察による人工魚礁の実態について-XX. 鹿児島湾奥沿岸海域の場合. 51-67.

## 南太平洋海域研究センター専任・兼務教官の 海外出張及び研修記録一覧表

(1989年12月～1990年11月)

氏名	所属	在外期間	目的国	用件
朝倉 哲彦	病院	元.12.2～12.14	アメリカ合衆国	アメリカてんかん学会出席
茶園 正明	水産	元.12.2～12.20	西部太平洋海域	潜水船による海洋気象の研究
山口 幸一	病院	元.12.6～12.10	モナコ・スペイン・ポルトガル・フランス	研究会出席及び資料収集
橋口 勉	農	元.12.8～2.1.8	中華人民共和国	家畜の品種分化に関する調査
高谷 紀夫	教養	2.1.3～2.21	タイ・中華人民共和国	仏教圏の宗教と社会の研究
神田 嘉延	教育	2.1.4～1.11	タイ	タイ国東北部の農村調査
井上 晃男	南海	2.1.4～1.31	タヒチ	毒化原因鞭毛藻の生息環境調査
岩切 成郎	水産	2.1.8～1.20	トンガ王国・ソロモン諸島	太平洋諸国会議出席・資料収集
石畑 清武	農	2.3.3～3.12	ブラジル	アセロラ栽培技術の調査と研究
寺師 慎一	南海	2.3.7～3.14	ニュージーランド	現地大学との国際交流
新田 栄治	教養	2.3.9～8.16	タイ	タイにおける古代居住論研究
井上 晃男	南海	2.4.11～4.23	ニュージーランド	調査及び共同研究の打ち合せ
松田 恵明	水産	2.5.7～5.17	大韓民国	実習及び韓国水産事情調査
市川 英雄	水産	2.5.7～5.17	大韓民国	実習及び韓国水産事情調査
湯脇 泰隆	水産	2.5.7～5.17	大韓民国	乗船実習及び漁業調査
田浦 悟	農	2.5.12～5.22	フィリピン	国際イネ遺伝学会出席
市川 洋	水産	2.5.18～6.3	アメリカ合衆国	黒潮変動に関する研究打ち合せ

氏名	所属	在外期間	目的国	用件
柄木田康之	南海	2.5.29～3.4.29	ミクロネシア連邦	オレアイ環礁の社会構造調査
荒井 啓	農	2.6.1～3.3.31	カナダ・アメリカ合衆国	植物ウイルスの生化学的研究
岩堀 修一	農	2.6.4～ 6.16	バングラデシュ	現地大学院計画実施協議調査
湯脇 泰隆	水産	2.6.11～ 7.12	パプアニューギニア	乗船実習及び漁業調査
富永 茂人	農	2.6.11～ 7.12	アメリカ合衆国	ジョージア州の果樹の調査
鈴木 廣志	水産	2.6.30～ 7.8	オーストラリア	国際甲殻類会議出席
山根 正気	理	2.7.10～ 8.8	ソビエト連邦	ウラジオストックにおいて共同研究
野呂 忠秀	水産	2.7.10～3.5.9	オーストラリア	海藻ホンダワラ属の分類学的研究
井上 晃男	南海	2.7.16～ 8.13	パプアニューギニア・ニューカレドニア・ニュージーランド・フィジー	南太平洋ラグーン域の調査
片岡千賀之	水産	2.7.16～ 8.13	パプアニューギニア・ニューカレドニア・ニュージーランド・フィジー	南太平洋ラグーン域の調査
佐熊 正史	歯	2.7.21～ 8.4	大韓民国	古人骨の人類学的共同調査
川村 軍蔵	水産	2.8.2～ 9.15	マレーシア	浮魚礁に関する資料収集
濱名 克己	農	2.8.10～ 8.24	ブラジル	世界牛病学会参加講演
品川 昭夫	農	2.8.19～ 8.27	中華人民共和国	中国土壤学会に参加
永富 昭	農	2.8.19～ 8.27	大韓民国	昆虫の分布調査及び資料収集
根建 心具	教養	2.8.20～ 10.23	チリ	現地大学との共同研究
湯川 淳一	農	2.8.25～ 9.10	チェコスロバキア・ポーランド・オーストリア	双翅目国際会議出席
市川 洋	水産	2.9.17～ 9.23	アメリカ合衆国	黒潮変動に関する研究打ち合せ
中野 和敬	南海	2.9.24～3.1.18	ソロモン諸島	マライタ島土壌肥沃度調査
新田 栄治	教養	2.10.12～ 12.27	タイ	タイの先史時代生産遺跡の調査
内尾 康人	医短	2.10.19～ 10.29	中華人民共和国	現地大学との学術研究
松田 恵明	水産	2.11.1～ 11.9	中華人民共和国	国際会議出席及び視察
岩堀 修一	農	2.11.3～ 11.9	中華人民共和国	国際柑橘シンポジウム出席
皆村 武一	法文	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
内尾 康人	医短	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
塚原 潤三	理	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
市川 敏弘	理	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
大木 公彦	理	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
林 満	農	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
富永 茂人	農	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
坂田 祐介	農	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
田浦 悟	農	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
寺師 慎一	南海	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
井上 晃男	南海	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究
四宮 明彦	水産	2.11.5～ 12.17	パプアニューギニア	南海研特定研究

(学報338～349号抜粋)

掲 示 板

第17回太平洋学術会議  
(XVII Pacific Science Congress)

へのご案内

第17回太平洋学術会議がハワイ大学、東西センター、ビショップ博物館の共催で、1990年5月27日から6月2日まで、ハワイ州ホノルル市のシェラトン・ワイキキで開催される。

本会議は、太平洋地域の学術交流を目的として1920年に発足した太平洋学術協会（科学者による民間組織）によって運営されている。第1回の会議は1920年にハワイのホノルルで開かれ、その後、太平洋戦争が始まるまでは3年毎に会議が開催され、戦時中は中止されたものの、1949年に再開された後は、4年毎に環太平洋各国で開催されている。過去3回の会議は、1979年にハバロフスク、1983年にダニーデン（ニュージーランド）、1987年にソウルで開催された。とくに近年は、環太平洋諸国のみならずアフリカやインド、ヨーロッパなどの科学者が太平洋地域へ示す関心も高くなり、今や本会議は名実ともに地球規模の国際会議となっている。

今回の会議は、“Towards the Pacific Century: The Challenge of Change”というキャッチフレーズのもとに、次のような6部門の主要テーマが設定されている。

#Global Environmental Change — Pacific Aspects

#Population, Health and Social Change  
#Biological Diversity  
#Science and Culture  
#Technologies for Development: Prospects for 21st Century  
#Dynamics of the Earth and Heavens: The Pacific Arena

発 表：ペーパー(オーラル),または,ポスター  
使用語：英語

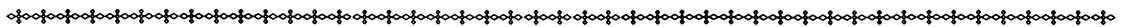
参加費：4月15日まで 275ドル（協会のメンバーは250ドル）

5月26日まで 325ドル（同, 300ドル）  
当日 375ドル（同, 350ドル）

申込先：XVII Pacific Science Congress  
2424 Maile Way, Fourth Floor,  
Honolulu, Hawaii 96822, U.S.A.

その他、詳細は南海研センターまでお問い合わせ下さい。（湯川淳一記）

このコーナーでは南太平洋地域および専任・兼務教官に多少なりとも関係ある情報をお伝えしてゆきたいと思います。情報をお持ちの方は是非ご投稿下さい。（出版委員会）



南海研だより No. 21 平成3年2月28日発行

発行：鹿児島大学南太平洋海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2058

ファクシミリ 0992(56)9358